

『仕える者となれ』(マタ 20:20~28)

ゼベダイの息子たちの母親が彼らと共にイエスのところに来て、二人の息子を弟子たちの中でも最高の地位に就かせてほしい、と願いました。二人の息子はペトロと並んで、弟子たちの中で最もイエスの近くにいた弟子です。彼ら三人だけがイエスの変容やゲツセマネでの祈りの時にイエスと共にいました。イエスは二人に自分が飲もうとしている杯を共に飲むことができるかと尋ねます。二人は「できます」と答えました。しかし、イエスは「自分の右と左に誰が座るかは自分の決めることではない」と言います。「定められた人々に許されるのだ」とは「神さまがお決めになることだ」という意味です。そして、二人の抜け駆けに怒る残りの弟子たちを呼び寄せて、イエスは「自分が来たのは仕えるためだ」と話しました。これは受難に向かう歩みだけでなく、これまでのイエスの歩み全体を貫く姿勢を表しています。27 節の「皆の僕になりなさい」は直訳では「あなたたちの僕になりなさい」です。マルコ福音書では全ての人の僕になることが勧められているのですが、マタイ福音書ではあなたたちの僕と共同体の内部で実践すべき倫理に限定されているのです。28 節で記されているように、イエスの死を「多くの人の身代金」とみなすのは、福音書ではこの箇所と元々の伝承であるマコ 10:45 だけです。新約聖書でも、これに最も近い表現はパウロの名によって書かれたテモテへの手紙一 2:6 に見出されるだけです。イエスの死を贖罪死とみなす考え方はマルコの時代またはそれ以前の時代にキリスト教世界でパウロなどによって広く採用されました。また、28 節の最後には「同じように」と仕える者としての模範が示されています。自分の命を与えるほどに、他の人たちに仕えるという模範の姿が示されているのでしょうか。しかし、それだけではありません。イエスは「私はあなたのために自分の命を献げる。あなたの救いは私が引き受けた。だから、あなたはもう自分のために何も心配する必要はない。あなたは他の人のことを考えるように」と、言っているのです。マルコ福音書に記されているように、イエスは時の権力者たちによって苦しみを受け、全ての人に仕える命を死に至るまで全うし、多くの人の罪を贖う身代金として自らの命を献げた人の子でした。このイエスを信頼し、その後ろに従う「あなたがた」は、いたずらに上昇志向に明け暮れることなく、支配者のような「大いなる者」ではなく、「全ての人に仕える者」となるように、というのが元々の伝承におけるメッセージであると思われます。